インドネシア邦字日刊紙「じゃかるた新聞」に掲載されたジャカルタ漁港に関する記事

1、第4期竣工式(2001年2月17日）
2、ジャカルタ漁港正月特集記事(2002年1月4日）
3、ジャカルタ日本人学校（以下JJS)教諭見学(2002年7月8日）
4、JJSフェスティバルでプロジェクトX【ジャカルタ漁港誕生】上演(2003年9月27日）
5、JJS4年生社会科見学(2006年6月13日）
6、経団連一行130名見学(2007年8月22日）
7、JJS4年生社会科見学(2008年6月6日）
8、著名人ODAモニター庄野真代さんの視察(2008年7月7日）
9、JJS4年生社会科見学(2010年6月4日）
10、管制塔完成式(2010年7月17日）
11、ジャカルタ在住邦人見学会(2010年9月7日）
12、JJS4年生社会科見学(2011年5月31日）
13、ジャカルタ在住邦人見学会(2011年8月8日）
14、ジャカルタ在住邦人見学会(2012年6月5日）
15、JJS4年生社会科見学(2012年6月26日）
16、リハビリ事業竣工式(2012年10月6日）
17、ジャカルタ漁港航空写真(2013年4月29日）
18、「ジャカルタ漁港物語」書評(2014年5月3日）
19、JJS5年生社会科見学(2014年8月28日）

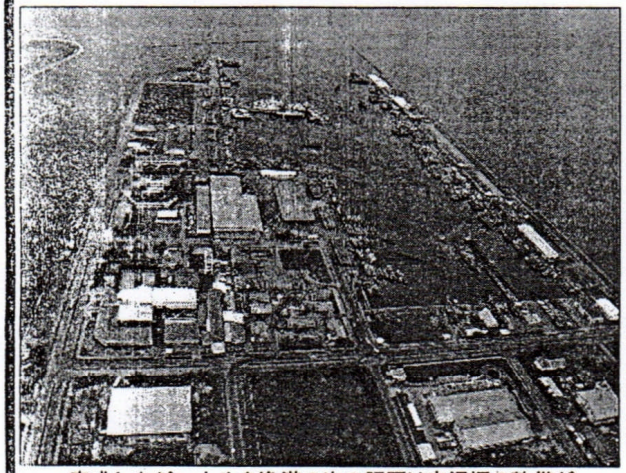
ジャカルタ漁港が完成

世界水準の魚資源基地に

日本へ生マグロも輸出

円借款126億円を融資

日本への魚資源の供給基地として重要性を高めてきたジャカルタ漁港の最終的なプロジェクトが完成、十六日、メガワティ副大統領らインドネシア政府首脳が出席し、竣工式が行われた。一九八〇年に開始された埋め立ての第一期工事から数え、二十年越しの長期プロジェクトは、日本政府が総額百二十六億円を融資、冷蔵設備から衛生設備に至る国際標準の漁港建設を目指した。今回の完成でジャカルタ漁港は、対日輸出の重要拠点となるだけでなく、海洋資源国建設を掲げるインドネシア政府にとって、外貨獲得の戦略拠点にもなる。計画段階からプロジェクトを担当した国際協力銀行ジャカルタ首席駐在員の柘山信夫さんは「自分が育てた子供が成人したような喜びです」と語った。（上野太郎）



完成したジャカルタ漁港の次の課題は交通網の整備だ

ジャカルタ漁港は一期、二に部分開港した。九八年に二期工事を終え一九八四年一着工開始した第四期は、海水の浄化システム、漁船修理施設増設、汚水処理場、マグロ水揚げセンター、新設、岸壁の増設、漁港内緑化整備、衛生環境の整備などが進められた。

トロール漁を禁止した一九八〇年代初期、インドネシア政府は漁業資源開発戦略を立て直し、ジャカルタ漁港を国際的な漁業基地として位置づけた。通貨危機など経済事情も加わり、工事は長期化したが、アブドゥルラフマン政権が外貨獲得と国民福祉向上のため海洋資源国を宣言したことで、プロジェクトの重要性が高まった。

こうした経緯を背景に一九七九年、当時の海外経済協力基金（OECF）が四十四億円を投じたのを皮切りに総額百二十六億五千七百万円を円借款としてインドネシア政府に供与した。

この結果、ジャカルタ漁港は陸揚げセンター、水産加工センター、水産物流通センター、親水レクリエーションセンターの四つの機能を持つ世界でも最大規模の漁港となった。関連施設で六千人の雇用を生み、約五百万人の漁民が支えるインドネシア漁業の象徴的な施設となる。

インドネシアは昨年、二百海里経済水域を宣言したばかり。その面積は米国、豪州に次ぎ世界三位だが、漁獲高は四百五十八万トン（一九九七年）で、日本の七百四十二万トンを下回る。日本が輸入する生マグロと冷凍エビに占めるインドネシア産のシェアは、それぞれ二五%、二二%に達し、インドネシアの海と日本人の食卓の関係は深い。

立案から参画してきたパシフィック・コンサルタンツ・インターナショナルのジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーの折下定夫さんは「国際水準の漁港となったが、今後、周辺の交通網整備が必要だ」と語った。

竣功式にはメガワティ副大統領、サルウォノ海洋水産相、ヌル協同組合・中小企業担当国務相、川上隆朗大使、柘山信夫・国際協力銀行ジャカルタ首席駐在員、庵原宏義・国際協力事業団ジャカルタ事務所所長らが出席した。

じゃかるた新聞

Menara Thamrin 1602,
Jl. M.H. Thamrin Kav.3,
Jakarta 10340
Rp.8,800
編集協力 ぴすく社
©PT.BINA KOMUNIKA ASIATAMA, BYSCH
License No.508/SK/MENPEN/SIUPP/1998

為替・株価

10,000円＝770,300ルピア（前日比4,200ルピア安、市中銀行調べ）

1ドル＝9,140ルピア（前日と変わらず、同）

10,000円＝810,000ルピア

1ドル＝9,525ルピア（両替商調べ）

JSI（ジャカルタ証券取引所株価指数）＝432.079（前日比8.144ポイント▼）

作文コーナー

☆ジャガーさん一番大すき

小学部3年1組
吉田　まさみ

わたしのいえには、ジャガーさんがいます。ジャガーさんは、どろぼ

経済レーダー

ジャカルタ漁港　活気付く魚の競り市

漁業の近代化に第一歩

近代漁業を育成し、外貨獲得、雇用促進、国民の栄養水準向上を図る国家プロジェクトとして、二十年がかりで建設が進められ、昨年三月に完成したジャカルタ漁港（ムアラ・バル）は、毎日、約三万人の漁業関係者らが出入りし、年間二万トンのマグロを出荷する世界有数の漁港として発展を遂げている。日本の政府開発援助（ODA）が、効率的に活用されたモデル事業としても内外の注目を浴びている。（上野太郎、写真も）

●栄えるジャカルタ築地

ジャカルタ漁港が最終的に完成した昨年三月以来、港内中の魚市場は一段と活気を増した。インドネシアのすべての海からさまざまの魚介類が集まり、ジャカルタの庶民の胃袋を満たす海の幸が、活発に取り引きされる夜の市。

漁港のゲートを通り抜けると左側に巨大なテントが設置されている。夕方から人が集まり始め、終わるのは明け方。いわばジャカルタの築地市場だ。

市民の多くが口にするバンデン（ミルクフィッシュ）やシジミのような貝類に混じり、サメやエイなど珍しい魚も売買されている。

西テベットの市場で販売するため、魚を買いに来たミナさん（六〇）は、魚介類の取引に四十年間従事するベテランだ。「この市場ができて、市場内での魚の窃盗がほとんどなくなりました。入場料以外の経費もかからなくなり、以前よりずっと良くなったと思います」と漁港の機能を絶賛した。

その一方で、「昔は魚の種類や量も豊富だった。今は良い魚は値段が高く、大手スーパーに全部、買い取られてしまう」との声も卸売り業者の間から聞かれた。

魚の詰まったカゴが整然と並ぶ、漁港内にあるボネコム社の倉庫

●港に住み着いて監督

漁港の立案段階から参画、現在は維持・管理事業を支援するパシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル（PCI）社のジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーの折下定夫さん（五四）は、プロジェクト開始当時から漁港建設に関わり、ジャカルタ漁港との付き合いは二十年を超える。

完工までの五年間、漁港内のコス（寮）に住み着いて、港の維持管理の仕事に従事する折下さんは、漁港内を毎日、車で巡回、休日は徒歩で散策するなど、ジャカルタ漁港に並々ならぬ愛情を注いでいる。

ゴミが山積するなどの問題点は写真に収め、インドネシア側の関係者に維持管理の大切さをアピールしているが、理解してもらえないことも多く、毎日が苦労の連続だという。

「例えば、街灯は治安向上のため、点灯させた方がいいのに、電気がもったいないと言って使用されないことがある。ここに住んでいないと分からないことも多いです。路上を作業場にしたり、簡易食堂や売店のために設けたスペースや、公衆トイレが使用されていなかったりと、設計者が考えた通りに、進まないのが現状です」と折下さんは苦労をにじませる。

●日にマグロ20トンが日本へ

グルメブームを背景に、一九八〇年代後半、日本でマグロブームが巻き起こった。ジャカルタ漁港もそれに合わせ、漁港の姿を大きく変化させた。

ジャカルタ漁港を基地とするマグロ漁船は二百五十隻を超える。木造マグロ船が所狭しとひしめく岸壁には、水揚げされたばかりのマグロを、仕分け、加工する工場が建ち並ぶ。世界で有数の生マグロの水揚げ港となったジャカルタ漁港から、一日平均二十トンの生マグロが日本に空輸されている。

毎月約百二十本のマグロを日本に輸出している加工工場経営のスワンディさんは、「真水の確保や、頻繁な窃盗などで困っている面もある」と述べ、港の運営の問題を指摘したが、「この商売を始めた当初と比べると、港湾設備は格段に良くなった」と評価している。

●ネズミ一匹いない漁港を

ODA批判が高まり、ジャカルタ漁港もやり玉に挙げられたことがある。「日本でのマグロブームに乗り、空飛ぶマグロの拠点になった」「地元民への魚供給の観点が軽視されている」と批判された。

折下さんは「もともと、マグロ漁業のために作られたわけではないのですが、たまたまマグロブームというのがあったため、その側面ばかりがクローズアップされてしまいました」と語る。

「白紙の状態から立案し、アフターケアやモニタリングまで面倒みる。それがわれわれの仕事。治安が良くて、ネズミ一匹いない、きれいでゴミがない漁港を目指したい」。

折下さんの言葉の端々からは、日本ではできない大プロジェクトを手がける責任感とやりがいがうかがえる。

●民間資本も呼び込む

冷凍設備や製氷工場を設置し、施設を充実させることで民間投資の誘致にも努めた。その結果、後背地では、冷凍倉庫やエビ加工の工場が建ち並び、日本や欧州、米国などに向けたエビ

夜の魚市場では、様々な種類の魚の売買が活発に行われている

海洋資源開発の拠点に

オランダ時代の灯台

の輸出拠点にもなった。

現在、進出企業数は八十四社、総額で二百億円以上の民間投資を呼び込んでいる。

外貨獲得に寄与するだけでなく、工場が出来たことで雇用も創出され、民間資本と融合したODAの運用の成功例として注目されている。

漁港内の民間企業の代表格として加工、倉庫業務を営むボネコム社は、千二百人の従業員を抱え、北欧から輸入した原料で水産加工の事業も展開した。

同社は、国際衛生基準のHACCP（危害分析重要管理点方式）の認定を取得、国際基準の企業に成長、ジャカルタ漁港の発展を支えるとともに、新たな民間投資の呼び水になっている。

●バタビア時代の灯台

インドネシアの漁港としては唯一の汚水場を設置。海水の浄化交換システムは、漁港内の水辺に捨てられたゴミを取り込み、生態系の自浄作用を活性化するためにマングローブを植樹するなどして、環境にも気を配っている。

市民の憩いの場として、レクリエーション機能の充実にも力を入れている。一七世紀にオランダが東インド会社を設立し、この地をバタビアと名付けた当時から残るインドネシア最古の灯台を、漁港内に保存し、護岸沿いに遊歩道も造った。

休日には、釣りに興じる地元民の姿も目立つ。「ジャカルタの名所の一つになれば」と折下さんは願っている。

●ショッピングセンターも

今後の問題点について、折下さんは「いくら良いものを作っても、マネジメントがしっかりしていないと。インドネシアの人たちが自らの手で運営していくことが大切だ。自分たちのプロジェクトという意識を持ってほしい」と語る。

一九九〇年、自立した管理体制を造ろうと漁業公社（PERUM）を組織。収益性のある事業は漁業公社が支援する。公共性が高く採算が取れない事業はインドネシアの海洋資源省漁業総局が担当できるようにしている。

具体的な課題として挙げるのが、周辺道路の整備。プルイット～高速道路を降り、漁港に着くまでは、漁民や買い物客で、ひしめく狭い路地を通行する必要があり、この状況をなんとか改善したいという。「政府が道路用の土地を確保したのですが、確保した用地が広すぎたこともあり、そこに住民が住み着いてしまいました」と折下さんは語る。

漁港の関係者が、漁港内で買い物ができるようにするために、古くなった既設の倉庫スペースに代わり、新しく三階建てのショッピングセンターを建設する計画も進んでいる。従来の商売の仕事を整理し、市場に訪れる人たちが均等にアクセスできるように、[illegible]

ジャカルタ漁港

[illegible]し、1980年に埋め立て工事を開始。[illegible]期工事を経て、1984年に部分開港した。

通貨危機を挟み、工事は長期化したが、98年に第4期工事を着工。[illegible]システム、漁船修理施設、汚水処理場、マグロ水揚げセンターなどの整備が進められた。

2001年3月、メガワティ副大統領（当時）が出席し、[illegible]センター、水産加工センター、[illegible]レクリエーションセンター[illegible]国際標準の漁港となった。

[illegible]マグロの水揚げ量を誇り、世界[illegible]としても知られている。

[illegible]海洋資源大国だが、漁港数は[illegible]わずか約600港。

[illegible]000港もある日本に比べ圧倒的[illegible]を目指すインドネシアにとって漁港建設がいかに重要かがわかる。

[illegible]、当時の海外経済協力基金が4億円を投じた[illegible]、日本政府は[illegible]で、総額126億[illegible]の資金を供与している。

東護岸に造られた遊歩道には、休日になると多くの市民が訪れる

世界有数のマグロ基地

ジャカルタ漁港を見学

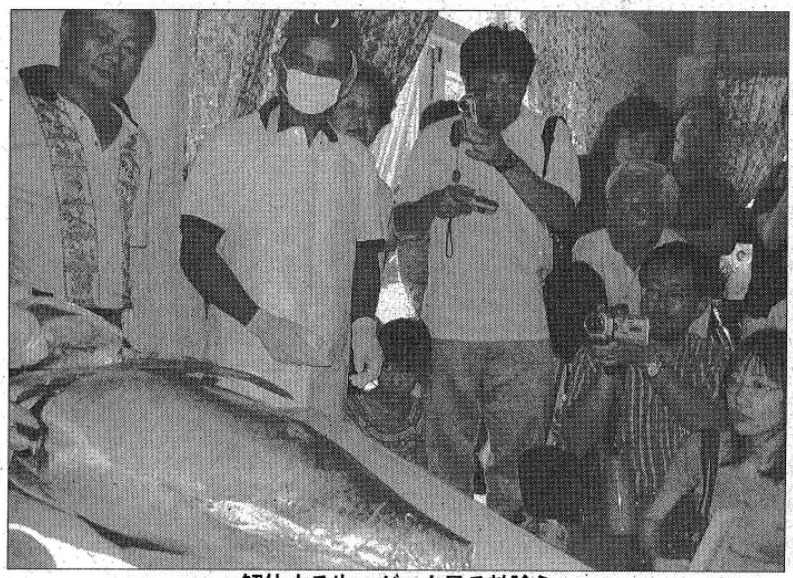
JJS教諭ら40人参加

自然保護の配慮に注目

インドネシアを深く知り、子供たちの教材に生かそうと、ジャカルタ日本人学校（青鹿輝雄校長、JJS）の教諭ら約四十人は六日、北ジャカルタにある、日本の政府開発援助（ODA）で造られたジャカルタ漁港を見学した。

分領国治・小学部教頭をはじめとするJJS教諭、浅井徹事務局長、バンドン日本人学校の教諭らが、家族そろって参加した。

ジャカルタ漁港は一九八〇年に着工し、二〇〇一年二月に竣工式を行った。供与された円借款は総額約百二十七億円。現在の年間水揚げ量は約五万トンで、インドネシア一だ。このうちマグロが約二万トンを占め、世界で有数のマグロ基地となっている。



解体する生マグロを見る教諭ら

漁港に到着したJJSの一行は、漁港の施行管理に当たるパシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル（PCI）の折下定夫さん（五四）の案内で、マグロ水揚げセンター、魚の加工工場と冷蔵倉庫、汚水処理場などを見て回った。

岸壁からは穏やかな海が眺められ、散策にも良さそうだ。一行は、横付けされた船から漁民が氷を捨てたり、魚を水揚げしたりしている姿をカメラに収め、マグロ漁用の長いはえ縄を巻き取っているのを珍しそうに見ていた。

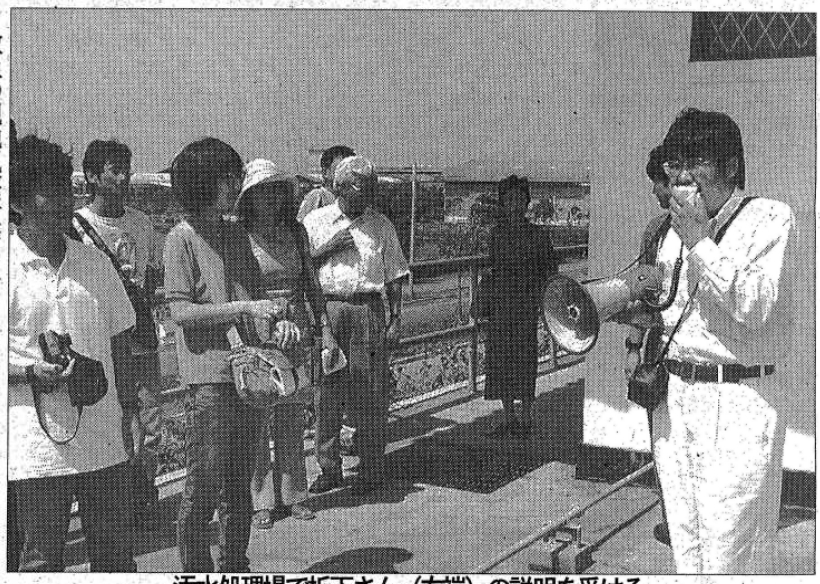
マグロ水揚げセンターでは、日本へ空輸されるマグロを氷水から出して梱包するところを見学した。

最高級のマグロが同センターでキロ当たり三―四万ルピアで買えると聞き、「学校でマグロパーティーだ」「でも、どうやって運ぶの」という声に、「ここで四つぐらいにさばいてもらって、発砲スチロールの箱に入れてもらうと簡単です」と折下さん。

魚工場の冷蔵倉庫は摂氏十度。外気温より一気に二十度も下がったことになり、「寒い、寒い」と震え上がった。その奥には、マイナス三十度の倉庫がある。「冷凍人間だ」などと言いながら中に入った全員がUターンして逃げ出し、艸香久人教諭は「インドネシアで一番寒い所です」。

折下さんが考案した、潮の干満を利用した「港内海水浄化システム」や、一年半前に、種が偶然流れ着いたのを見つけて始めたというマングローブ植林も見学し、「プロジェクトと合わせ自然保護が実行されていることに感動した」（原康雄・国際交流ディレクター）との声が上がっていた。

昼食は、ジャカルタ漁港に水揚げされたばかりの新鮮な生マグロをその場で解体して手巻き寿司やたたきに、漁港の魚市場で購入した養殖エビをしゃぶしゃぶにして食べた。



汚水処理場で折下さん（右端）の説明を受ける

教員の現地視察研修の一環として、社会見学の候補地視察も兼ねて漁港見学を企画した寺澤明・小学部教務主任は「インドネシアをもっとよく知りたいし、子供たちにも知らせたいという気持ちがある。漁港は生の魚が見られ、子供たちに体験させるのにぴったり」と語った。

二年四組担任の久保康子教諭は「こんなに近代的な設備がインドネシアにあり、日本が深くかかわっているということに、素直な驚きがあった。子供たちもそうだと思う。インドネシアのエビの養殖は良く耳にしていたが、マグロは知らなかったので、新しいインドネシアを知った気がした」と語った。

バンドン日本人学校の佐藤健治教諭は「食べ物と環境は、子供たちにも身近な話題。是非、子供たちに見学させてあげたい」と語っていた。

（池田華子、写真も）

JJSフェス開く

のびのびと楽しい文化祭

ジャカルタ日本人学校（青鹿輝雄校長、児童生徒八百四十四人、JJS）は二十七、二十八日の両日、毎年恒例の文化祭「JJSフェスティバル」を開催した。四回目となる今年は、小・中学部の児童・生徒だけでなく、初めて幼稚部の園児がそろいの法被（はっぴ）を着て参加、祭り囃子に合わせた太鼓の演奏を披露し、四歳から十五歳までのオールJJSの祭りを盛り上げた。それぞれのステージ発表も、多彩で工夫を凝らした出し物が勢揃い。ドキュメンタリーやミュージカルなど凝った内容のプログラムの数々は、二日間にわたって会場を埋めた保護者たちを喜ばせた。（山村英隆、写真も）

■障害を乗り越え

土、日と二日間続いた祭りは、小中学部の全クラスと招待された交流校のアンニサ校中学部も参加。

数あるプログラムの中で、小学部五年生による「プロジェクトX　挑戦者たち～ジャカルタ漁港誕生」が話題を呼んだ。本紙でも詳しく報道したジャカルタ漁港が完成するまでの秘話を、テンポよくまとめたドキュメンタリー仕立ての劇だ。世界に通用する漁港をジャカルタに作ろうとした折下定夫さんにスポットを当てた。

会場で発表を見た折下さんが「実際に児童が漁港に視察に来るなど、きちんと調べていて、とても良くできていた」と太鼓判を押すほどの内容だった。

しかし、劇のストーリーと同じように、発表の準備が万事順調に進んだわけではない。折下さん役を演じた町田渉君（一〇）が、本番直前の二十五日にサッカーで足をけがするアクシデントに見舞われたのだ。

一時はどうなることかと心配されたが、クラスメートにも助けられ、町田君は何とか本番でも演技をこなした。町田君は「足はまだ痛いけど、なんとか成功して良かった。折下さんがプロジェクトの完成を願うシーンの表現が一番難しかった」とほっとした表情をのぞかせた。

計画から障壁を乗り越え、プロジェクトの達成へ向けてひたむきに努力する内容が、児童の姿と重なって見えた。

■ソーラン対決

二クラスある中学部三年は、クラスごとによさこいソーラン踊りを披露。揃いの法被の背中に書かれた文字は、三年一組が「一舞入魂」、二組が「飛翔」。どちらも甲乙付けがたい、気合いの入ったパフォーマンスで観客を酔わせた。

このほかにも、喫茶店やお化け屋敷など文化祭ならではのイベントがあり、来場者は、日本では初秋に当たる九月最後の休日を大いに楽しんでいた。

幼稚部も初参加

JJS幼稚部は、小・中学部とは別の場所にあることなどから、今までJJSフェスティバルへの参加は見送ってきたが、今年は保護者の協力も得て念願の初参加を果たした。

法被を着た園児が、会場に響きわたる大迫力の太鼓の「おはやし」を披露した。大きな舞台での演奏に少し緊張気味の園児もいたが、息の合ったリズムに、見守る幼稚部の先生も、ほっとした表情。

JJS幼稚部の土屋かつ子園長は「園児たちに広い場所でのびのびと発表してほしかった。幼稚部から小学部に進級した先輩の児童の姿を、子供たちに見せる良い機会なので、来年もフェスティバルへ参加したい」と語った。

The Daily Jakarta Shimbun

2006.6.13

JJS4年生
120人

汚水処理場などを見学

――社会科の課外学習で

きれいになった水を触る児童たち＝折下さん提供

大都市の環境問題学ぶ

ジャカルタ日本人学校（JJS、桐生直校長）の四年生百二十人は八日、社会科の授業の一環として、バンテン州スルポンの浄水場、西ジャカルタのスンダクラパ港のパサール・イカンの汚水処理場、北ジャカルタのスントゥルのゴミ中継基地の三カ所を見学した。

生徒たちは、バス三台に分乗し、ゴミ処理や水の汚染など環境問題について考え、世界でも有数の汚染された大都市ジャカルタが抱える環境問題の悩みについて多くの知識を得た。

漁港にある汚水処理場では、パシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル（PCI）社の折下定夫・ジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーが、児童たちにわかりやすく、化学薬品を使わずに汚水をきれいな水にする方法を説明。

児童は折下さんの説明を聞きながらメモを片手に見学した。

また、折下さんの元には、あらかじめ学習し、準備してきた質問以外に、さまざまな質問が子どもたちから寄せられた。

「化学的な薬品を使わずに、微生物を利用して水をきれいにする過程を説明するのは難しいが、人間の体にいる微生物などを例に挙げて、なるべくわかりやすく説明した」と折下さん。

処理された後、きれいな水に思わず触れた児童たちは歓声を上げて喜んだ。児童たちはこの日の感想などをまとめて処理場へ送る予定。

今年で四回目となったこの社会科見学。折下さんは「汚水処理場を見学することは、普段なかなかできないことなので、今後もぜひ続けてほしい」と語った。

経団連・日商ミッション

ODAプロジェクトを視察

ジャカルタ漁港

最初の円借款で建設された製氷工場を見学する経団連と日商ミッション＝鶴見泰寿写す

安倍首相のインドネシア、インド、マレーシアの訪問に合わせ、ジャカルタを訪問した日本経団連と日本商工会議所のアジア経済ミッションの約四十人と在インドネシアの日系企業約三十人の計七十人は二十日午前、北ジャカルタのムアラバルのジャカルタ漁港を約二時間見学した。

同港の事務所で設計、施工管理に一九七八年からたずさわってきたパシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル（PCI）社の折下定夫・ジャカルタ漁港プロジェクトマネージャーが、同漁港の建設経緯などを含めたこれまでの歴史や約四万人のインドネシア人が働き、同漁港内の施設で訓練を受けた約五千人のインドネシア人の若者が日本の漁船で働いてきたことなどをプロジェクターを用いて説明。質疑応答の時間には経団連の参加者が地盤沈下や地下水の供給問題、浄水場の設備などについて質問した。

製氷工場見学では、一ブロック約五十キロの氷が一日に四千個作られる工程を見学。一同は水しぶきを上げ、勢いよく目の前に氷が並ぶ姿に興味を示した。同工場は最初の円借款で一九八四年に建設され、二十三年間稼働し続けている。

水産加工品を輸出するボネコム社の加工工場を訪問し、流れ作業を見学。工場関係者から加工されているタイの名前が「パカパカ」「カチカチ」との説明を受けると、愛嬌のある名前に笑顔を見せる見学者もいた。

バンバン・ステジョ・ジャカルタ漁港長は「今回の訪問がインドネシアと日本の水産ビジネスが広がる良いきっかけになれば」と感想を述べた。

同漁港は一九七三年からこれまでに国際協力銀行（JBIC）の円借款約百二十六億円で建設、リハビリ事業が行われ、世界有数のマグロ基地に発展したインドネシアにおけるODAの代表的なプロジェクトとして様々な使節団が訪問している。

TNT販売者を逮捕

バリックパパン

東ジャワ州パスルアンで漁業用とみられる爆発物が爆発した事件で、警察当局は二十一日、東カリマンタン州バリックパパンで高性能火薬TNTをナディル容疑者に販売したとして、サイッド容疑者（五〇）、エディ・シスワント容疑者（五二）を逮捕した。

調べでは、サイッド容疑者は今月十一日、スラバヤでエディ容疑者にTNTと起爆装置をナディル容疑者に渡すよう命じ、取引が終わった後、フェリーで自宅のあるバリックパパンに戻ってきたとみられる。

ナディル容疑者が購入したTNTは計約四十五キロに上り、保管先のパスルアンの民家で爆発、同容疑者の祖母の自宅にも一部を保管していたことが分かっている。

マレーシア、サウジの出稼ぎ者の虐待防止に

独立調査委設立を検討

続発するインドネシア人出稼ぎ労働者の虐待事件を受け、労働移住省の出稼ぎ労働者派遣対策本部ジュムフル・ヒダヤット本部長は二十日、インドネシア人労働者受け入れ主要国であるサウジアラビアとマレーシアに、独立機関による調査システムを設置することを検討していると明らかにした。

調査システムについてジュムフル本部長は、各国の

ＪＪＳ社会科見学

自然の大切さを学ぶ

「ごみの行方」観察

小学４年
106人参加

の小学部四年生（百六人）は五日、社会科見学を行い、バンテン州のスルポン浄水場、ジャカルタ漁港のパサール・イカン汚水処理場、スンタルごみ中継基地を訪れた。この社会科見学で子どもたちは、日常的に排出しているごみや生活排水などがどこに運ばれ、どのように処理されているのかなど、普段なかなか目にすることのない「ごみの行方」を見つめ、大都市ジャカルタの抱えるごみ問題について学んだ。

（坪井大典、写真も）

最初に訪れたのは、スルポン浄水場。ここでは、汚水に塩素や石灰を加えて殺菌処理し、ろ過を繰り返して、飲むことができるほどのきれいな水に浄化している。

子どもたちは、雨が降り、川となって山から海へと流れた水が太陽熱によって水蒸気となり、雲を形成、また雨となって地上に降るという「水のサイクル」を、浄水場職員から学んだ。

その後は、浄水工程を見学した。子どもたちは、五ヘクタールの敷地内に並べられた巨大な水槽のようなろ過タンクで、毎秒約三千リットルの汚水が浄化されていく光景に、目を丸くした。

轟々（ごうごう）と音を立て流れる茶色い濁流を目の当たりにし、子どもたちは「すごい勢いで流れてた」「ウォータースライダーみたいだね」と興奮気味。

次に訪れたのは日本の円借款で完成した総面積八十ヘクタールのジャカルタ漁港。年間約六万トンという国内最大の水揚げ量を誇るこの漁港の一角にあるパサール・イカン汚水処理場を見学した。

ここでは、大量の汚水に酸素を混ぜ、かくはんし、水中の微生物の活動を活性化させて汚れを分解している。その後、汚水を沈殿槽にため、汚泥を沈殿させ、きれいな上澄み部分だけを海に流す。自然の浄化作用を利用した汚水処理だ。

処理方法を解説したのは、漁港の施工管理に当たるパシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル（ＰＣＩ）に所属し、ジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーを務める折下定夫さん。折下さんが汚水と処理後のきれいな水をそれぞれ見せると、「すごい」「こんなにきれいになるの」と、子どもたちは自然の力に驚きの声を上げた。

「自然には本来、汚水の分解作用がある。しかし、ごみを川や海に廃棄すると、分解されずに水底に沈殿、浄化されにくくなってしまう。この見学会を通して一番伝えたいのは、自然環境を大切にする気持ちです」と、折下さんはＪＪＳの児童らにメッセージを送った。

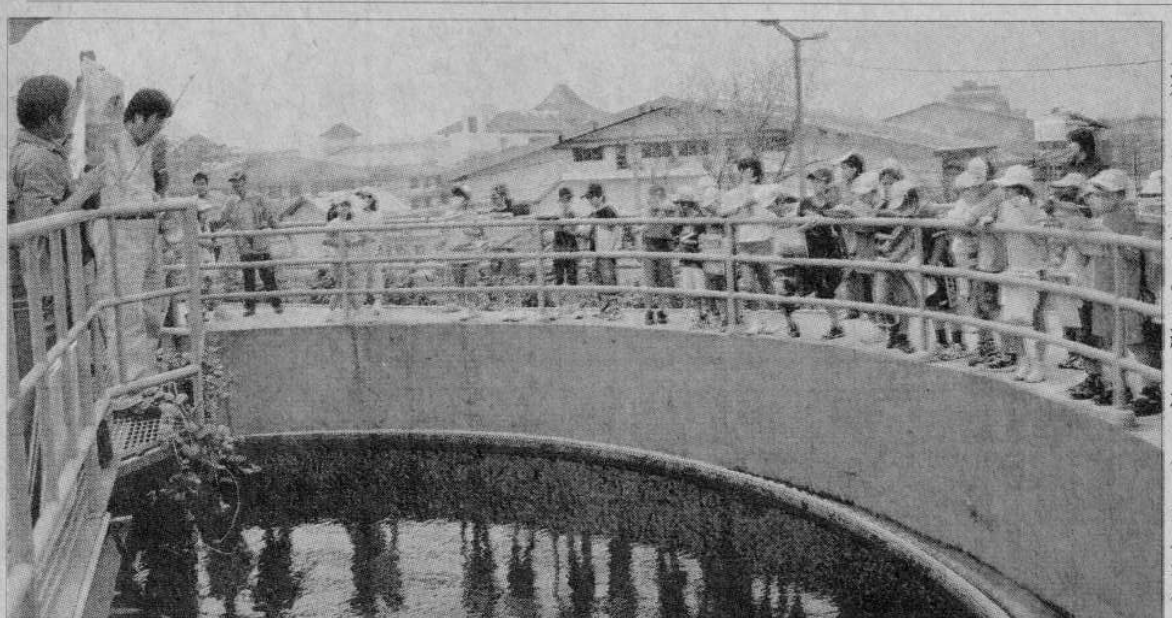
最後にスンタルごみ中継基地を見学。バスを降りた子どもたちは、周囲に立ち込めた強烈な悪臭に、思わず鼻を覆った。

ここには、ジャカルタ各地から、一日約千五百トンにも上るごみが集まる。この中継基地で圧縮されたごみは、「ごみ山」として知られるバンタルグバンごみ最終処分場へと運ばれていく。

集積場にはおびただしいハエが群がり、ごみ収集トラックが大量のごみを次々と集積タンクに捨てていく。その度に、粉じんと、分別されないまま廃棄された紙やビニールの断片などが、悪臭を放ち舞い上がる。

目の前に広がる想像を絶する光景に、子どもたちは「迫力があった」「臭すぎて息ができなかった」「まるでごみの滝、ごみの海だった」と口々に話した。

社会科見学に参加した大野友莉さんは「面白かった。水や自然を大切にしなきゃいけないということが分かった」と笑顔で振り返った。



汚水処理場を見学するＪＪＳの児童らと、「１日1000トンの汚水をきれいにしています」と説明する折下さん（左から２人目）

ジャカルタ漁港を訪問

歌手の庄野真代さん

ODA事業を視察

マングローブの護岸を視察し、折下さん（左）から説明を受ける庄野さん

国際協力機関（JICA）の母子手帳普及プロジェクトを視察した歌手の庄野真代さんはこのほど、政府開発援助（ODA）著名人モニターとして、三十六年かけて日本の円借款百二十六億円で建設した北ジャカルタ・ムラアバルのジャカルタ漁港を訪れ、国際協力銀行（JBIC）が進めているODAプロジェクト「ジャカルタ漁港リハビリ事業」を視察した。

同漁港は現在、ジャカルタ市の地下水過剰汲み上げの影響を受け、岸壁が二十数年間で六十センチ沈下し、高潮時には岸壁が冠水するなど被害が深刻で、JBICは二〇〇四年、岸壁リハビリ事業のための三十四億円の有償資金協力を決定した。現在、環境や景観に配慮し、マングローブを利用した護岸作りや衛生管理マニュアルの作成を進めている。

一九七八年から設計、施工管理にたずさわってきたジャカルタ漁港プロジェクトマネージャーの折下定夫さんから、同漁港の建設経緯や、潮位差を利用した海水浄化システム、水揚げされたマグロの日本への輸出経路などについて説明を受けた庄野さんは、「日本のODAで建設された漁港から輸出されたマグロを食べていることを、多くの日本人に知ってもらいたいですね」と感想を述べた。

その後、折下さんの案内でマングローブの護岸を見学。「マングローブは海水で育つと、葉は人の汗のようにしょっぱくなるんですよ」と説明を受けた庄野さんは、葉をちぎってなめ、ジャカルタの海の味を舌で確かめた。

庄野さんは、ブカシ警察やジャボタベック鉄道、バンドン工科大学、チタリック上流保全造成事業なども視察した。JBICは、庄野さんが視察したODAの現場の印象などを取りまとめ、事業評価報告書を通して日本の国民に報告する。（岡坂泰寛、写真も）

サマリンダ 国民体育大会開く

33州7600人が参加

四年に一度のスポーツの祭典・第十七回国民体育大会（PON）が五日、東カ

インドネシア人と合同稽古

JJC空手部

空手協会 大村師範が指導　「ゆっくり正確に突け」

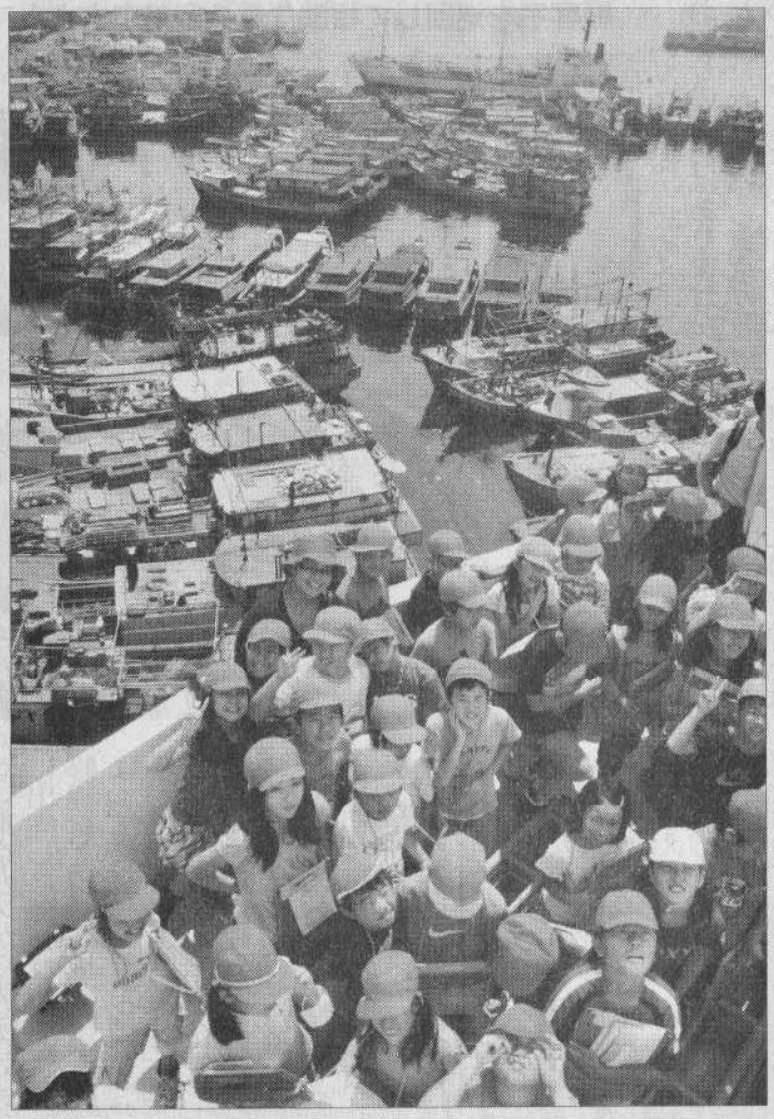
ＪＪＳ小学部４年88人

汚水処理場など見学

資源の大切さ学ぶ

ジャカルタ日本人学校（ＪＪＳ、長谷川清孝校長）の小学部四年生の八十八人は三日、社会科見学で、バンテン州のスルポン浄水場、ジャカルタ北部のジャカルタ漁港にある汚水処理場、スンタルのごみ中継基地を訪問した。普段の生活では目に触れる機会が少ないが、市民生活には不可欠なごみや汚水処理の様子を見学し、今後の実生活に生かそうと、毎年小学四年生が行っている。子どもたちは、職員たちの説明に耳を傾けながら熱心にメモを取っていた。

（川上幸夫、写真も）



7月17日に完成式を行うコントロールタワーから、漁港を見渡した小学4年生の児童

日本の円借款で一九八四年に建設されたインドネシア最大の漁港、ジャカルタ漁港では、汚水処理場を訪問。約三百八十隻の漁船が行き交い、約百の水産業者が加工場などを構え、約五千人が働き、毎日約四万人が出入りする巨大漁港が排出する汚水を処理する工程を見学した。

国際協力機構（ＪＩＣＡ）プロジェクトの一環で、漁港の施工管理をするオリエンタル・コンサルタンツの折下定夫・ジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーら同社の職員が浄化の仕組みを説明。

四つのタンクを使い、東京ドーム十五個分の漁港の敷地内から、毎日二十五メートルプールで二杯分排出される汚水を、一ミリリットル当たり数千万から数億個存在する細菌などの微生物が分解することで浄化される仕組みを説明した。

汚水を処理するのに多大な労力や時間が費やされていることを目の当たりにした四年三組の梅地伊吹さんは、児童を代表し「こまめに水道を止めるなどして、なるべく水を使わないようにします」と感想を語った。

汚水処理場の見学前には、漁港内で漁船の往来を管理するコントロールタワーを見学した。建物はほぼ完成し、七月十七日に完成式を予定している。

漁港内の施設を見渡すことができる、高さ三十三メートルの管理テラスに上ると、子どもたちから「木の船がいっぱい。良く見える」などの声が上がった。

最後に北ジャカルタ・スンタルのごみ中継基地を見学。周囲に強烈な悪臭が立ち込める現場に着くと、事前に用意していたマスクを装着する子どもの姿もあった。

中継基地では、毎日ジャカルタ各地から、一日約一千五百トンのごみが集まり、西ジャワ州ブカシのバンタルグバンのごみ最終処分場に運ぶためにゴミを圧縮する。子どもたちは、トラックで運びこまれたごみが、機械で圧縮される様子を見学した。

ジャカルタ漁港

円借款で監視塔完成

マグロ船の拠点に「貫禄」

マグロ船でにぎわう北ジャカルタ、ムアラ・バルのジャカルタ漁港（海洋水産省管理）に、漁船を監視し港の安全を確保する高さ四十二メートルのコントロールタワーが完工し、十六日、完成式が行われた。この日は一九八四年に漁港がオープンしてちょうど十六年目にあたる。コントロールタワーには監視員が常駐し、港をひん繁に出入りする漁船同士の事故を防ぐ。将来、スピーカーやモニター・カメラを設置し、漁港内の船の動きを監視できるようにする。

完成式には塩尻孝二郎・駐インドネシア日本大使、ファデル・ムハマッド海洋水産相ら約四百人が出席。

一九七八年から同漁港の建設・管理に携わり、現在は漁港内に住み込んで、管理を続けてきたコンサルタント会社の折下定夫さんは「海洋国インドネシアを代表する漁港に貫禄がついた」と喜んでいる。

ファデル海洋水産相は「数次にわたる日本の円借款で、ジャカルタ漁港は近代的な漁港に発展しインドネシアの水産業に大きく貢献してきた。関係省庁や州と協力し、周辺地域を再開発、地盤沈下対策も立ててウォーター・フロント・シティとして発展させたい」と希望を述べた。

（川上幸夫、写真も）

ジャカルタ漁港　一九七七年に最初の円借款が決まり、八四年に開港。その後も円借款が実施され、施設や岸壁などが整備された。面積は約七十ヘクタール、東京ドーム十五個分の広さ。円借款の総額は約百六十億円。インド洋で獲ったマグロなどを日本や欧州に輸出する基地。年間九千隻の漁船が出入りする。約百軒の水産加工場が約一万五千人を雇用。一日約四万人が漁港を出入りし、雇用確保と外貨獲得に貢献している。

「」とどの子も学校の枠をとてゲームに興じた。

最後に、BJSの児童・生が校舎内を案内した。本棚並べられた作文集「南十字」見つけて喜ぶ子、壁に掲示された展示物を興味津々に眺める子などJJSの児童は、オランダ様式の建物の校舎を楽しそうに見学した。

案内役のBJSの子どもたちは、「（教室に）みんな入るかな」などと心配しながら、自分たちの慣れ親しんだ校舎を誇らしげに案内した。

約二時間の交流会の後、BJSの子どもたちに見送られJJSの児童はジャカルタへの帰路に着いた。

JJS六年生は十四日から

ジャカルタ漁港内を見渡すことができる監視塔＝北ジャカルタのムアラ・バル

「大統領は

と投稿　大統領
通るたび大渋滞
訴えた。
政治評論家ア
ギオ氏は「イス

厳重

芸能人の動画流出事件
友人を容疑者に断定
国家警察

芸能人のわいせつ動画流出事件で国家警察は十六日、人気バンド、ピーターパンのアルバム製作などにかかわっていた西ジャワ州バンドン在住の音響技術者

漁港監視塔から夕日満喫

浜松会　マグロの頭を堪能

昨年6月に発足した静岡県浜松市にゆかりのある人たちの集まり「浜松会」はこのほど、北ジャカルタのジャカルタ漁港（ムアラ・バル）内にある、同会メンバーの折下定夫さんの住居の食堂「料亭おりしも」で行われた。

大人11人と子ども4人が参加。メンバーは、今年7月に完成したジャカルタ漁港の監視塔に集まり、30年以上同漁港の建設・管理に携わるコンサルタントの折下さんの案内で、漁船の安全を監視する管制塔の屋上まで登り、抜群の景色を満喫した＝写真。天気が良く、高さ35mの監視塔の屋上から眼下に広がる漁港の全景や、プラウスリブの島々、ジャカルタ中心部のビル群を見渡した。

隣接する高級住宅地パンタイ・ムティアラのヨットを思わせるデザインのアパートメント群を背景に沈む夕日を堪能した後、漁港内にある折下さんらが住む家の中に設けられた「料亭おりしも」に移動し、インド洋で獲れた新鮮なマグロの刺身などに舌鼓を打った。

普段はなかなか食べる機会がない、マグロの頭を焼いたカマの山盛りを見て、子供たちはびっくりしたが、食べたら「美味しい」と感想を語った。

はまぐりで出汁を取ったスープで、料亭おりしも特製の海老のしゃぶしゃぶや海老のつみれなどを堪能。大人も子供も大満足だった。

同会は10月に「大人だけの浜松会」を企画している。

また、インドネシアとの友好を促進する別の団体、「浜松インドネシア協会（本部・浜松市）」の今月末の来イに合わせ、協会メンバーとの合同会食を予定している。浜松インドネシア協会は26日に、西ジャワ州バンドンでインドネシア日本文化祭を開催するために来イする。浜松会は、祭りへの参加も計画しているという。

「浜松にゆかりがあり、興味のある方はぜひ連絡してください」

問い合わせは、石川さん（メール reiko.ishikawa@mandom.co.id）まで。

社会の仕組みを知ろう

漁港、ごみ基地を見学

JJS小学部4年生

ジャカルタ日本人学校（JJS）小学部四年生は二十五日、社会科見学で北ジャカルタのムアラ・バルにあるジャカルタ漁港と、スンタルのごみ中継基地を訪問した。マグロをはじめとする魚介類が水揚げされる漁港と廃棄物が集まるごみ基地。消費生活の入り口と出口を見つめることで、普段の生活では気がつかない社会の仕組みへの理解を深めようと、小学部四年生を対象に昨年に続いての実施となった。（吉田拓史、写真も）

コントロールタワーで記念撮影する児童ら。防波堤、灯台、漁船の管理などの説明を受けた

子どもたちは漁港の汚水処理場を見学。漁港を施工管理するオリエンタル・コンサルタンツの折下定夫・ジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーから、水産加工や魚市場から出る汚水をきれいにしてから海に流す過程の説明を受けた。児童たちは、汚水浄化で微生物を利用することに関心を深め、「微生物の数は」「どうやって微生物を捕まえるのか」などの質問を折下さんにぶつけた。

次に岸壁に沿って植樹されたマングローブを見学した。児童は根本を泳ぐ小魚をしげしげと眺めたり、木になった種を摘んだりした。一組の田口詩織さんはジャカルタの海は汚いというイメージを持っていたが、漁港を見学してみて「ここはきれい」と感じたという。

折下さんによると、約八年ほど前からマングローブの種をまき始めた。海水と淡水が混ざる環境が適しており、種をまいた後は自生するので、コストもほとんどゼロに近かったという。従来のようにコンクリートだけではなく、マングローブを交えることで、より環境負荷の低い護岸を目指している。

ジャカルタ漁港は円借款により一九八四年に開港。その後も円借款が段階的に実施され、埋め立てで確保した総面積約七十ヘクタールに施設や岸壁を整備した。折下プロジェクトマネジャーは七八年から国際協力機構（JICA）プロジェクトの一環で、漁港施工管理に携わってきた。児童らは昨年七月に完成したコントロールタワーにも上った。高さ二十三メートルの屋上は、漁港、ジャワ海のほか、ジャカルタ市街地までも一望できる絶景。常駐する監視員が港を出入りする漁船に指示を与え、衝突事故を防ぐ目的で建設された。

漁港からバス移動で訪れたごみ中継基地では、底に圧縮機の付いたごみを落とす大きな器型の穴と、圧縮したごみを詰めるコンテナ（重量約二十トン）、全工程を管理・指示するコントロールルームの三カ所を見学した。同基地のウスマン所長によると、一日に四―五トントラック約二百台分のごみがジャカルタ各地から集まり、圧縮後コンテナで西ジャワ州ブカシ市のバンタルグバン廃棄物処分場へ運ばれるという。三組の坂井達哉さんは「たくさんのごみが集まってくると聞いて驚いた」と語った。

プラットホーム（手前）とコンロールルーム（左上）から圧縮機へとゴミを落とす収集車を見学する児童ら

「巨大魚にびっくり」

ジャカルタ漁港を見学

在留邦人の親子ら15人

在留邦人の子どもと保護者の有志十五人が集まり、五日、北ジャカルタ・ムアラ・バルのジャカルタ漁港を見学した。漁港を施工管理するオリエンタル・コンサルタンツの折下定夫ジャカルタ漁港プロジェクトマネジャーの案内を受け、ジャボデタベック（首都圏）へ水産物を供給するだけでなく日本へのマグロ、エビなどの一大供給地でもある同魚港について学び、夏休みの自由研究や社会科の授業などに生かす考えだ。

魚市場で「大きい」とアカマンボウを指さす子どもら

「うおお」「すげえ」。子どもらの興奮した声が響く。午後六時、日没後の魚市場には裸電球が煌々と灯り、さまざまな魚が並ぶ。従業員たちは夜のピークに向け、魚の入ったかごを運んだり、仕分けやさばくのに忙しい。新聞紙大のアカマンボウ、カジキなどの大きさは子どもらを驚かせた。毎夜、一万人以上の漁業者でにぎわうという。

この日、子どもらがはじめに訪れたのは、漁港内にある六千トン収容の冷凍庫。冷凍庫の気温はなんとマイナス三十度。外気との温度差は六十度で、中に入ると眼鏡が真っ白に曇る。子どもらは「かちかちだ」と言いながら、整然と並べられたかごの中の輸出向けの冷凍魚に目を走らせた。

貯蔵物は首都圏各地に運搬される、大手鶏肉飲食店の鶏肉、ジュースの原液、アイスクリームなど幅広い。折下さんは「多くの飲食業者がジャカルタ漁港にある大小五十の冷蔵庫を利用している。業者には、倉庫を集約でき、自分で所有しなくてもいい利点がある」と説明する。

次に訪れた氷工場では、五十キロの氷柱が次々にトラックに積み込まれ、漁船や港内施設に運ばれる様子を見た。一日に六千トンの氷を生産し、氷点を下げるため、高濃度の塩水が使われるという。

ほかにも、岸壁沿いの護岸用マングローブ・ジャカルタ市街まで一望に収めるコントロールタワーの見学に加え、折下さんのプレゼンテーションなどもあり、四時間の見学は内容盛りだくさん。運営や流通など漁業のさまざま側面を知る機会となった。小学五年の阪本了佑さん（一一）は「漁港にいろいろな仕組みがあって面白い」と楽しそうだ。

最後は漁港内にある折下さんの住居、通称「料亭おりしも」で、水揚げされたばかりのマグロの刺身やえびのしゃぶしゃぶに舌鼓を打った。

（吉田拓史、写真も）

ネットゲームで気晴らし？

ラマダン中は若者客増加

ラマダン（断食月）に入り、ジョクジャカルタ特別州ティモホのインターネットカフェ「スパイダーネット」には、日中多くの若者が来店している＝写真、アンタラ通信。空腹を忘れるためか、真剣な表情で画面を見つめ、ゲームに集中しているようだ。

断食中、昼寝をしたり、自分が夢中になれることをして気を紛らわす人が多いという。特に、断食を始めたばかりの若い人にとって、十時間以上飲食しないのは容易ではないのかもしれない。

豪州政府に懇願

「未成年者を釈放して」

拘束中の漁師の家族ら

人身売買にかかわったとして豪州当局が昨年六月に拘束したインドネシア人漁師ハディ・クルニアワンさん（十六）の家族らが、豪

漁港で懇親会

ジャカルタ浜松会

ジャカルタ浜松会は５月26日、北ジャカルタ・ムアラ・バルのジャカルタ漁港で懇親会を開催、初参加者６人を含む15人が参加した＝写真。

メンバーは夕刻、漁港の管制塔に集合。さわやかな海風を受け、漁港に停泊の漁船群やプロウスリブの島々、ジャカルタ市内の高層ビル群を満喫した。

真っ赤な太陽が西の海に沈むのを見届け、同漁港内に居住する浜松会の折下定夫会長の住居の食堂「料亭おりしも」に移動し、ウチワエビ、生マグロの手巻き寿司、ハマグリスープ、エビしゃぶ、エビつみれなど新鮮な魚介類に舌鼓を打った。

昨年、市制100周年を記念に制作された「浜松100年の歴史のDVD」を鑑賞し、懐かしい昔の浜松市の町並みや自然豊かな美しいふるさとの風景に会員から歓声が上がった。

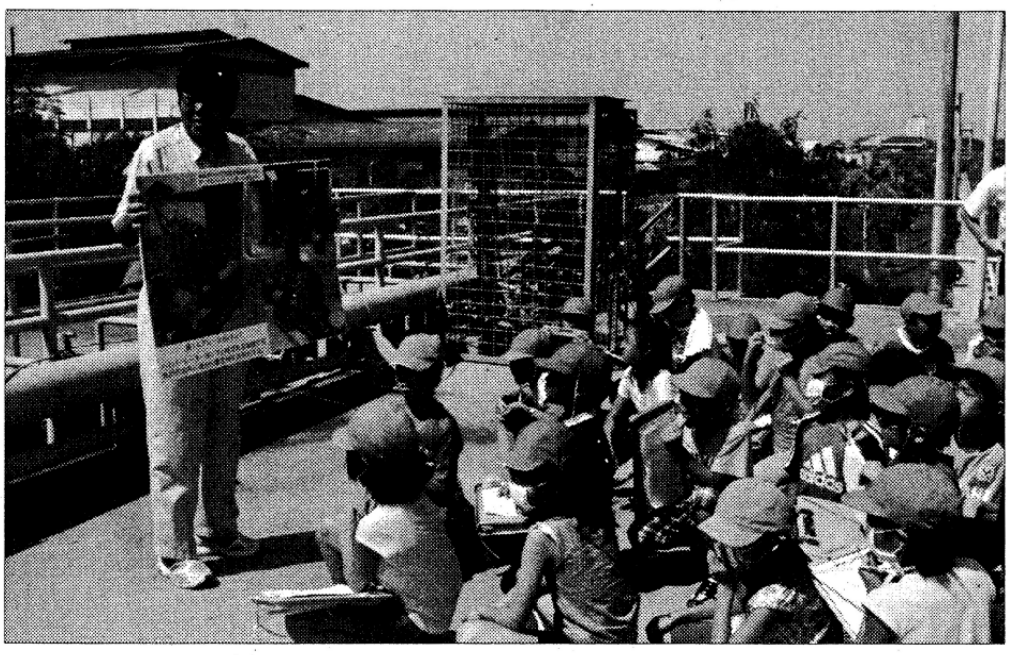
赴任して間もない参加者は、在住歴の長い会員に、ゴルフのキャディへのチップの相場はいくらかなどと質問する場面もあり、和やかなひとときを過ごした。

「現在、ジャカルタ浜松会は総勢44人の会員がおり、浜松に縁のある人たちが集い、時には遠州弁を交えながら会合を楽しんでおります。次回は10月に浜松会を開催しますので、浜松に縁のある方はぜひご連絡下さい」

問い合わせは、ジャカルタ浜松会事務局の石川さん（携帯０８１２・１００５・４５１、メールreiko@jac-bc.co.id）まで。

ジャカルタ漁港を訪問

ＪＪＳ小学部４年生132人 社会科見学



折下さんの説明を聞く児童ら

ジャカルタ日本人学校（ＪＪＳ）小学部４年生132人は24日、社会科見学で北ジャカルタのムアラ・バルにあるジャカルタ漁港を訪れた。普段はあまり目にする機会がない漁港で、自分たちが消費する魚の供給基地を訪問し、理解を深めようと昨年に引き続き行われた。（小塩航大、写真も）

子どもたちは最初に漁港を施工管理するオリエンタル・コンサルタンツ社の折下定夫漁港プロジェクトマネジャーから、ジャカルタ漁港の歴史や施設などについて簡単な説明を受けた。34年前と現在の漁港を比べた写真を目にして、驚いた様子。その後、２年前に完成したコントロールタワーに上り、潮風を気持ちよく感じた。

高さ33メートルの屋上からはどこまでも続く海の光景。子どもたちは「日本はどこ」「インドネシアの魚が運ばれてくるのはどこ」と先生に積極的に質問した。

次に、漁港内にある汚水処理施設を見学。漁港内で使用された水を微生物に分解させてきれいにする一連の工程を観察した。汚水浄化の際、微生物を活性化させるために空気を送る装置に児童らは興味を示した。

最後にジャカルタ漁港の西側に沿って植えられたマングローブを見学。木々の間にいる小魚やうっそうと生えるマングローブを興味津々に眺めた。

このマングローブは９年前から折下さんが自ら種をまいている。今では数えきれないマングローブの木々が存在しているという。一度種をまけば、その後成長したマングローブが種を落とし自生する。環境にやさしい防波堤をゆっくりと作っていく。

見学終了後、児童らはマングローブの木陰で涼みながら昼食を食べ、マングローブの根元にいるカニや、木々を観察するなど思い思いに楽しんだ。

森美月さんは「タワーのてっぺんから見た景色がきれいだった。マングローブの木が成長していってほしい」と感想を語った。

ジャカルタ漁港は１９８４年に日本の円借款により開港。日本のＯＤＡ（政府開発援助）プロジェクトで造られた。現在の総面積は陸上80ヘクタール、海上40ヘクタールの計１２０ヘクタール。今年の７月で一連のＯＤＡプロジェクトの工事は終了を迎える。

折下さんは「この社会科見学が続いていってほしい。ジャカルタ漁港をもっとって、お父さんやお母さと一緒に足を運んでほしい」と語った。

折下定夫さん

1日約4万人が出入りするインドネシア最大のジャカルタ漁港（北ジャカルタのムアラ・バル）で今年7月、日本の円借款を受け、1980年から4期に分けて実施された工事と2004年から始まった「ジャカルタ漁港リハビリ事業」が終了した。今月3日には海洋水産相や大使館関係者を招き、完成式典を開催。マングローブが生えた遊歩道には週末、家族連れが訪れ、市民の憩いの場になっている。1978年から漁港の建設・管理に携わり、漁港内の寮に住み続けてきた建設コンサルタント会社「オリエンタルコンサルタンツ」の折下定夫漁港プロジェクトマネジャーに話を聞いた。（高橋佳久、写真も）

建設管理に携わり30年

ジャカルタ漁港、全事業終了

マングローブをもっと整備したら観光にも生かすことができると折下さん

世界有数の生産量

「まさかこれだけの年月のプロジェクトに関わることになるとは誰も想像していなかったと思う」。78年、サルタントチームでジャカルタ漁港の建設事業に着手した。

インドネシアは米国、豪州に次ぐ世界第3位の排他的経済水域（EEZ）を持っているにもかかわらず、整備された漁港がなく、十分な海洋資源を生かしきれていなかった。そういった理由もあり、ジャワ海の漁業基地となるよう、ジャカルタ漁港建設が計画されたという。

現在は、年間2万トンの水産物を加工輸出し、毎日1億円以上の外貨を獲得する漁港に発展。2009年には約982万トンの漁業生産量で世界第3位となっている。

マングローブ護岸

ジャカルタ漁港の目玉の一つとして定着し、現在も整備が進められているのが折下さんが発案したマングローブを生かした護岸整備だ。

「ローカリティ」に着目し、お金をかけずにインドネシアの温暖な気候を生かす」ことを漁港整備のモットーとしている折下さん。「01年に、最初は石で造られていた護岸の隙間にマングローブの種が偶然流れついた。すると、あれよあれよという間に成長して、これは護岸に最適だと思った」と振り返る。マングローブは潮風を防ぎ、昼過ぎには木陰をつくる。そのためマングローブの護岸沿いに整備された遊歩道と合わせ、漁港利用者の憩いの場として親しまれている。

また潮位の変化を利用した「港内海水浄化システム」も折下さんが考案した。通常の漁港の海水浄化はボートでゴミを簡単に取るだけで、このようにシステム化されている例はないという。

3日に開かれたリハビリ事業の完成式典では、海水浄化システムの改良版などが紹介され、インドネシアからはシャリフ・チチ相、日本側からは在インドネシア日本大使館の島田順二公使、国際協力機構（JICA）インドネシア事務所の小原基文所長らが出席した。

リハビリ事業で建設された新しい管理棟でテープカットするシャリフ海洋水産相（右から3人目）、島田公使（同2人目）＝3日

国内最大の漁業基地

ハビリ事業の完成式典では、海水浄化システムの改良版などが紹介され、インドネシアからはシャリフ・チチ相、日本側からは在インドネシア日本大使館の島田順二公使、国際協力機構（JICA）インドネシア事務所の小原基文所長らが出席した。

ジャカルタの築地に

2003年ごろから、ジャカルタ漁港はジャカルタ日本人学校（JJS）の子どもたちが社会科見学に訪れたり、日本などから視察に来る関係者も多くなった。

折下さんは友人らに自身の住居の食堂を「料亭おりしも」と名付け開放している。料亭内の壁には訪れた人々の写真が所狭しと並べられている。「もっと多くの人に漁港を利用してもらいたい」と折下さん。今後はマグロの水揚げの現場も紹介し、さらに親しまれる漁港を目指す。

プロジェクトが終了した現在でも漁港の整備に関わっている折下さんは「個人的にはやり残していることがある」と語り、「地盤沈下の問題も完全には解決できていない」と心配が尽きない。「ただ今後はインドネシアの人たちだけで資金を調達し、国際的な衛生基準に合う漁港を目指して維持管理をする必要がある。日本の『築地』のような漁港になったらうれしい」と今後の発展に期待を込めた。

「どんどん海外進出を」

浜松市の鈴木市長 官民130人が交流会

乾杯する鈴木市長（右）や日本貿易振興機構ジャカルタ事務所の富吉賢一所長ら（左）ら

「世界都市・自治体連合」（UCLG）のアジア太平洋支部（ASPEC）会合出席のため、静岡県浜松市の鈴木康友市長が3―6日の日程でジャカルタを訪問している。

これに合わせ、浜松商工会議所はインドネシア視察団21人、同会議所青年部はインドネシア研修でメンバー12人をそれぞれ派遣しており、浜松市など静岡県西部に本社を置く企業の現地法人幹部、ジャカルタ浜松会のメンバーらを加え、総勢約130人が5日夜、ジャカルタ内のホテルに集まり交流会を開いた。

交流会には、鈴木市長のほか、鹿取克章駐インドネシア日本大使、下川眞樹太公使、工業省のブディ・ダルマディ最先端技術活用主要産業総局長、インドネシア日本友好協会（PPIJ）のヘル・サントソ事務局長らが出席。

2009年8月以来、3年ぶりの来イとなる鈴木市長は、二輪車業界を中心にインドネシアとの関係が深い同市の企業について、「まだ、進出意欲が盛んな企業はいっぱいある。どんどん海外進出してほしい。産業空洞化という話もあるが、海外に出て行った企業は元気で、取引先を増やしたりしている。本社は浜松にあるので、そのような企業が頑張ることで浜松経済が潤うと思っている」と話し、企業の海外展開を積極的に支援していく方針を示した。

商工会議所は年1回の視察で今回、昨年のインドに次いでインドネシアを選び、2―5日の日程で工業団地4カ所、日系企業7社などを視察。団長を務めたスズキの宮川勇顧問は「どの工業団地も土地が完売というような状況。今回のメンバーは中小企業が多く、レンタル工場への関心も高かった。視察先の会社はどこも元気で若々しい印象。インドネシアの力を目の当たりにした」と感想を語った。

前交通局長を初聴取

容疑者断定から3カ月

汚職撲滅委

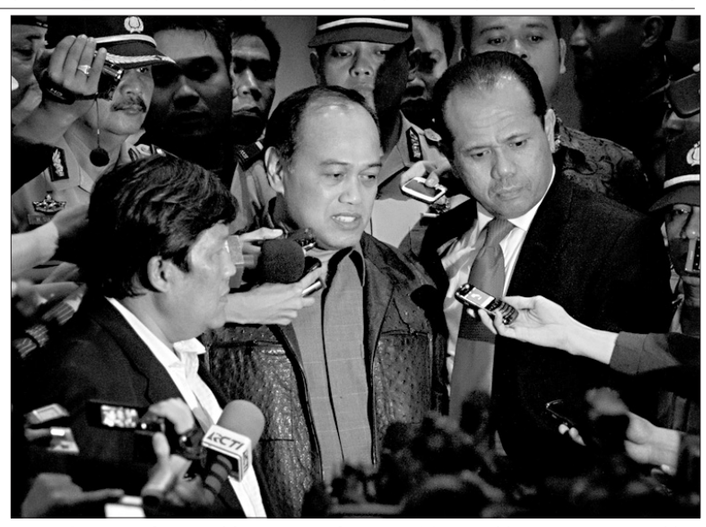
国家警察交通局が実施した運転教習機材調達事業に絡む汚職事件で、汚職撲滅委員会（KPK）は5日、7月に容疑者に断定されて以来、出頭を拒否してきたジョコ・スシロ前国家警察交通局長（現警察学校校長、休職中）を初めて事情聴取した。KPKは逮捕する可能性も示唆していたが、同容疑者は約8時間の聴取を終え、そのまま帰宅した。

これまで国家警察は、警察幹部が関与した事件をKPKが摘発したことに猛反発。独自に内部調査を進め、他の警察官らの身柄を拘束、ジョコ容疑者ら幹部を取り調べるなどしてKPKに抵抗してきた。

ジョコ容疑者は、運転教習機材調達事業（総額196億ルピア）で、受注業者から20億ルピアの賄賂を受領した疑いが持たれている。同容疑者は、昨年4月、ティムール・プラドポ国家警察長官の承諾を得て受注業者を選定したと主張。事件の捜査の矛先は警察トップに向けられたが、国家警察のボイ・ラフリ・アマル報道局長は「長官が受注業者承諾書に署名したのは確かだが、事業に絡む不正とは無関係」と関与を否定している。

非政府組織（NGO）汚職監視団（ICW）のフェブリ・ディアンシャ氏は「KPKが実施した交通局の家宅捜索後、国家警察は内部調査に着手したが、進展はみられない」と指摘。警察はKPKに協力し、早急に警察幹部の捜査を進めるべきだと訴えた。

ジョコ容疑者の弁護人のトミー・シホタン氏は「ジョコ氏はこれまで出頭を拒否してきたのではなく、警察の捜査手続きに沿って対処していく」と弁明。「警察幹部として法を順守する。KPKの捜査にも協力していく」と強調した。



8時間の聴取を終え、記者団の質問に答えるジョコ前交通局長＝アンタラ通信

運輸、商業省が高評価

KPKの汚職防止調査

汚職撲滅委員会（KPK）は4日、国家機関などを対象にした汚職防止策の実施状況の調査結果を発表し、運輸省と商業省が優れた防止策を実施していると明らかにした。

KPKは大型汚職事件の犯人の逮捕・起訴のほかに、汚職を防止する制度・文化の構築も重点目標として掲げており、調査はその一環。今年はこれまでに18の省庁と最高裁、国会、地方自治体など36の機関を対象に調査を実施し、倫理規定や調達・人材管理の透明性、市民からの苦情受け付けの制度など、分野別の汚職撲滅策の実施具合を点数化した。

点数の高かった運輸省のイスカンダル・アブバカル監察官によると、同省ではKPKの調査対象になっているそれぞれの分野で対策を講じているほか、調達制度の電子化で透明化を進めており、汚職の可能性が著しく減っているという。

■インフラ、教育で多発

一方、非政府組織（NGO）の汚職監視団（ICW）は4日、今年上半期に汚職事件は285件発生し、損失額は1兆2200億ルピアに上ると明らかにした。

2010年同期の176件、2兆1千億ルピアに比べると、損失額は減っているが、件数は増加しているという。

分野別ではインフラ事業関連の汚職事件が最も多く、今年は87件発生。予算関連が50件、教育関連が29件と続いている。

カディンと米国

食糧生産で協力

インドネシア商工会議所（カディン）は米国と食糧生産で協力する。2010年に、ユドヨノ大統領とオバマ大統領が署名した米イ包括的パートナーシップの一環。

米国国際開発庁（USAID）が、インドネシアの事業者に対し、生産設備購入の金融支援や、収穫が減った場合の農業保険を提供する。

ジョクジャカルタ特別州スレマンにあるヒンドゥー教遺跡プランバナン寺院で2日、覚書を締結した。

グランメリアでぼや

けが人なし

南ジャカルタ・ラスナサイド通りのホテル・グランメリア・ジャカルタで5日夕、ぼやが発生した。けが人の報告はない。

ホテルのスタッフによると、ぼやは午後5時半ごろ、16階建てのホテルの屋上で発生。電気回線のショートが出火原因とみられている。利用客は一時、外へ避難した。火はすぐに消し止められ、通常通りの営業に戻った。

黒煙が外に広がり、消防車が駆け付けるなどしたため、周辺は一時、騒ぎとなったが、大きな混乱はなかったという。

―お断り―

7日（日）は休刊日のため、じゃかるた新聞をお休みします。ご了承ください。

ジョコウィ氏を案内

州庁舎でファウジ知事

ジャカルタ特別州庁舎を案内し、報道陣の前で笑顔を見せるファウジ州知事（左）とジョコウィ次期知事＝アンタラ通信

就任を目前に控えたジョコ・ウィドド（ジョコウィ）次期ジャカルタ特別州知事は5日、中央ジャカルタの州庁舎を訪れ、ファウジ・ボウォ知事ら州政府幹部らとの懇親会に出席した。

7日で任期満了するファウジ氏はこの日が仕事納めとなった。ジョコウィ氏とバスキ・チャハヤ・プルナマ次期副州知事とともに庁舎内を案内。懇親会では州政府幹部数十人に2人を紹介し、「新しいジャカルタづくりに向け、全力を尽くしてほしい」と激励した。

激論を戦わせるなどした選挙戦の緊迫感は消え、ファウジ氏は終始穏やかな笑みを浮かべ、ジョコウィ氏とバスキ氏を迎えた。ジョコウィ氏を「知事さん」と呼び、冗談を交わして記者団を沸かせた。

これに先立ち、ジョコウィ氏は同日、国会を訪れ、支持母体の闘争民主党（PDIP）会派の議員と会合を開いた。

新正副州知事の就任式は7日に予定されていたが、内務省での手続きなどに時間がかかり、11日前後に延期される見込み。

じゃかるた新聞

Menara Thamrin 305
Jl. M.H. Thamrin Kav. 3
Jakarta 10340
Phone : 62-21-230-3830

Rp.12,000

編集協力 びすく社
© PT. BINA KOMUNIKA ASIATAMA, BYSCH
License No.508/SK/MENPEN/SIUPP/1998

為替・株価

10,000円＝1,169,000ルピア
（前日比400ルピア高、三菱東京UFJ銀行T.T.B）
1ドル＝9,270ルピア
（前日比15ルピア高、同）
10,000円＝1,215,000ルピア
1ドル＝9,570ルピア（両替商調べ）

インドネシア証券取引所株価指数
＝4,311.314（前日比39.853ポイント△）

みなみ十字・第43号

☆バスケ

中学部2年1組（執筆時）
山口　輝

バスケとは、バスケットコートで一つのボールを五対五で、ゴールリングの中に入れて得点を競うゲームだ。

僕は今、このスポーツにものすごくはまっている。中一の時にバスケ部に入ったのだが、その時は身長を伸ばすためや、体力をつけたいという理由でやっていたのだった。もちろん上手になりたいという理由もあったが、僕は素人だったから上手にバスケはできなかった。僕以外の人は、みんな上手で、凄い、と思った。スリーポイントをスパッ、と入れる人もいた。僕には絶対に無理な話だったが、スリーポイントをあっさり入れる人になって上手になりたいと思った。そして、そう思っているうちに少しだけ上達して、いつの間にかバスケをしていることに楽しさを感じていた。

今でも身長を伸ばしたいという気持ちでバスケをしている。だけど、楽しいからバスケをやっている、という気持ちの方が強い。

来年も再来年も、そのまた来年もバスケ部に入って楽しくバスケをしたい。上手にシュートを入れたり、ドリブルをしたりする人になりたい。

フラッシュ・ニュース

■市庁舎でソロサラダ

5日、次期ジャカルタ特別州知事のジョコ・ウィドド（通称ジョコウィ）ソロ市長が中央ジャカルタの州庁舎を訪問するのを受けて、州庁舎では中部ジャワ州ソロの料理であるソロサラダを提供。「われわれはジョコウィ氏のためにソロサラダを準備した」と州庁舎の宴会係。（ブリタ・ジャカルタ）

■これが男だ！

国軍記念日の5日、中部ジャワ州ソロ市の憲兵隊員スバギヨさん（50）が24時間歩き続けるというユニークな挑戦に挑んだ。4日午前10時から市内を歩き始め、5日午前10時に終了。歩いた距離は約115.2キロ。けいれんする足を冷却スプレーで冷やしながら歩いたという。（メトロTV）

■約1％が失敗

国軍記念日の5日、国軍創立67年を祝福した軍事演習で、パラシュートで落下した兵士725人のうち7人が着地点を外した。兵士は高度8,000フィートから降下し、東ジャカルタのハリム・プルダナクスマ空港に着地する予定だったが、2人が近くの道路に、2人が空港付近の空軍総司令部敷地内に着地し、2人が池に落ち、1人が木に引っかかった。ハリム空港によると、兵士は全員けがなどはなかった。パラシュートが着地点を外すことは珍しくないという。（ブリタ・ジャカルタ）

■厳しい仕打ち

西ジャワ州インドラマユ県クランクンで先月30日、オートバイを盗んだ男が所有者に焼き殺される事件が発生した。盗難後、所有者らに発見された男はガソリンをかけられ、ライターで点火されたという。（ポス・コタ）

■ハロウィーンで美人お化け？

南ジャカルタの国軍グントゥル拘置所の貯水タンクに、美人のお化けが現れるといううわさが広がっている。従業員によると、お化けは長髪で白い服を着ている。見たことがあるという人も多く、お化けの正体について様々な憶測が飛び交っている。（ドゥティック・ニュース）

三井住友銀

地場中堅銀の株取得か

40％出資で筆頭株主に

三井住友銀行が、地場系中堅銀行の国家年金貯蓄銀行（ＢＴＰＮ）の株式40％を取得する方向で交渉を進めていると、28日までに複数メディアが報じた。全国に広範な支店網を持つ地場銀行に出資し、リテール分野の成長を取り込む考え。インドネシアの銀行界では近年、当局の外資規制が厳しくなっており、今後の動向に注目が集まりそうだ。

取得金額は12～18億ドル件としては過去最大の規模時点）する米大手投資ファンドのＴＰＧから買い取り、筆頭株主になる計画。銀のインドネシア銀買収案57・9％を保有（昨年3月

一部報道によると、来月中の基本合意を目指している。インドネシア中銀の許可を得た上で、正式に株を取得できる。

ＢＴＰＮは、１９５８年に退役軍人有志による年金貯蓄組織として西ジャワ州バンドンで設立され、86年に現在の名称となった。２００８年にジャカルタ証券取引所（当時、現在インドネシア証券取引所）に上場。同年にＴＰＧが71・６％の株式を取得した。

昨年末時点で融資残高39兆ルピアで16位。国内２５０都市に１１４０の支店、６万９１００のＡＴＭ（現金自動預払機）を持つ。ＢＴＰＮに対しては、三菱東京ＵＦＪ銀行も情報収集を進め、株式取得に関心を示していた。

■銀行再編進むか

東南アジア域内でみても金融セクターの成長率が高いインドネシアには、近隣諸国の銀行から熱い視線が注がれ、参入や事業拡大が相次いでいる。これまで周辺国と比べ外資規制が緩かったが、外銀の支店に対し現地法人化の義務付けを検討するなど、インドネシア中銀は最近、規制強化の方針を打ち出している。

シンガポールＤＢＳグループがダナモン銀行の買収の方針を表明した後の昨年７月、中銀は単独株主の銀行への出資上限を原則40％に設定した。協議は１年以上続いているが、正式な許可はいまだに発効されていない。

一方、国際競争力を高め事業拡大基盤を強化するため、中銀は地場銀による買収を歓迎する方針を示している。

ＡＳＥＡＮ加盟へ

東ティモール

インドネシアのマルティ・ナタレガワ外相は26日、東ティモールの東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）への加盟について、大筋で合意したことを明らかにした。地元紙が報じた。加盟の時期ははっきりしていない。

ブルネイでのＡＳＥＡＮ首脳会議に出席したユドヨノ大統領に同行した外相が帰国後、地元報道陣に明らかにした。マルティ外相は「小さな一歩だが、重大な前進だ」としている。実現すれば、11カ国目の加盟国になる。

東ティモールは２００２年にインドネシアから独立後、07年からＡＳＥＡＮ加盟を模索。インドネシアがＡＳＥＡＮ議長国を務めた11年に加盟を正式に申請した。インドネシアは加盟を支援していたが、他国との調整が付かないままだった。

新藤総務相来イ

通信情報で協力強化

新藤義孝総務相は28日来イし、30日までの日程で、ティファトゥル・スンビリン通信情報相、東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）事務局幹部との会談やＡＳＥＡＮ防災人道支援調整センターへの訪問などを予定する。

28日ジャカルタに到着。通信情報相らとの会談で防災、ＡＳＥＡＮの連結性強化の分野でのＩＣＴ（情報通信技術）活用などを話し合い、協力促進につなげたい考えだ。

林農相、来月来イ

日本食品輸出目指す

林芳正農林水産相は来月5日から2日間の日程で、インドネシアを訪問する。ススウォノ農相ら閣僚と会談するほか、地場の食品輸入関係者らとの意見交換を予定する。安倍晋三首相は、日本が交渉に参加する見通しとなった環太平洋連携協定（ＴＰＰ）をにらみ、農林水産物の輸出を1兆円規模に倍増する目標を掲げている。

同農相のほかハッタ・ラジャサ経済担当調整相、ギタ・ウィルヤワン商業相と会談し、日本産の農林水産物の輸出促進や貿易について意見交換する。

安倍政権は農業を経済再生のための成長分野と位置づけている。インドネシアはＴＰＰ交渉には加わっていないが、経済成長に伴い拡大を続ける中間層を抱える有望市場とみられている。

来イ前の3、４の両日はベトナムで関係閣僚と会談する。同国とは、農業分野での協力、交流を進めることを確認する文書に署名を交わす。

来月実施先送りか

私用車限定燃料値上げ

補助金燃料の私用車限定値上げの調整が関係省庁・団体で遅れているため、政府は5月の実施を見送る方向で検討している。ジュリアン・パシャ大統領報道官が28日民放テレビ局メトロＴＶに明らかにした。

報道官によると、ジェロ・ワチック・エネルギー鉱物資源相が「エネルギー鉱物資源省、小売り事業者、国営石油ガス・プルタミナの三者で値上げの調整が完了しておらず、現段階で実施すれば新しい問題を引き起こしかねない」とユドヨノ大統領に報告。これに対し大統領は「準備ができるまで、政策を実施しない方がいい」と判断した。

値上げには小売り事業者の反発が強い。業界団体の全国石油ガス経営者協会ジャカルタ、ブカシ、タンゲラン支部は、政策が実施された場合、プルタミナに対する補助金燃料の発注を一切止めて販売を停止すると主張し、政策の変更を要求している。

同協会ブカシ支部は、ガソリンスタンドに長蛇の列ができており、限定値上げが実施された場合、ガソリンスタンドで混乱が生じ暴動の恐れもあると主張。私用車以外が使用する４５００リピア据え置きの補助金燃料を取り扱う給油所を限定することで、販売しない給油所は大幅に売り上げが落ち込むと懸念している。

ユドヨノ大統領は外遊中も対外的に燃料補助金問題の解決への意欲を示した。26日の帰国時にも改めて「富裕層、中間層が享受する不必要な補助金はなくすべきだ」という政府見解を繰り返し、５月実施を目指していた。

経営者に有罪

商工会は抗議

最賃払わず

東ジャワ州スラバヤの企業経営者が、従業員53人に対し法定最低賃金を下回る給料しか払わなかったとして、最高裁は24日、同氏に禁錮1年、罰金1億ルピアの判決を言い渡した。これに対し、実業界からは、抗議の声が上がっている。

インドネシア商工会議所（カディン）のスルヨ・バンバン・スリスト会頭は25日、「非常に遺憾だ」と述べ、法廷に持ち込む前の段階で、政府機関による仲裁の枠組みを充実させる必要があると強調した。

経営者協会（アピンド）のソファヤン・ワナンディ会長は、「急激な賃金上昇に耐えられない中小企業が多い。大企業が罰せられるのであれば、われわれは問題視しない」と語り、判決に不快感を見せた。

落選は地域的要因

イ期待のマリ氏 ＷＴＯ事務局長選

世界貿易機関（ＷＴＯ）の次期事務局長選考で、インドネシアのマリ・パンゲストゥ観光創造経済相が最終候補から外れたことについて、地元メディアからは、中南米からの選出を望む地域的要因が当落を左右したとの見方が出ている。マリ氏は経済分析の鋭さや国際会合などで手腕が評価されていた。

最終選考に残ったのは、ブラジルのロベルト・アゼベドＷＴＯ担当大使とメキシコのエルミニオ・ブランコ元商工振興相で、いずれも中南米出身者。英字紙ジャカルタポストは、「地域的な感情が大勢を決めた」とする大蔵省関係者の話しを紹介した。

中南米かアフリカからの選出を望む声が高く、アフリカからはケニアとガーナから候補者が立っていたが、いずれも1次選考で落選。アゼベドとエルミニオ両氏の支持でまとまったとみられる。

国際経済機関のトップ人事をめぐっては近年、２０１１年の国際通貨基金（ＩＭＦ）専務理事選、昨年の世界銀行総裁選ともに、新興国からの選出を目指す動きが広がったが、いずれも欧米出身者が選出されていた。

マリ氏は「国際的な統治に貢献する新興国インドネシアを代表し、選考に参加できたことを誇りに思う」述べ、結果を受け入れる考え。

メーデー、警備強化

労組補助金削減に抗議

今年のメーデーは燃料補助金の削減へ全国各地でデモが激化した。ジャカルタの反発でデモ隊が暴徒化する可能性があるとみて、国家警察は警戒を高めている。28日、ジャカルタ・グローブ電子版が報じた。

国家警察のバドゥロディン・ハイティ長官補佐官は、政府が検討している燃料補助金の削減は労働者に負担がかかり、「ジャカルタ特別州内、特にイスタナ（大統領宮殿）前を重点的に警戒する」と述べた。東ジャワ州スラバヤ、北スマトラ州メダン、南スラウェシ州マカッサル、リアウ諸島州バタム島でも警備体制を強化する方針。

国家財政悪化の原因になっている燃料補助金の削減をめぐっては昨年3月にもでもデモ隊と警官隊が衝突するなど混乱が起きた。可決する見込みだった燃料値上げ法案は、連立与党の造反があり土壇場で否決されている。

インドネシア労働組合連盟（ＫＰＳＩ）のサイド・イクバル会長はメーデーにイスタナや国会、省庁など首都圏で労働者15万人のよるデモを展開すると明らかにした。地方でも20州で１００万人以上を動員するという。

イクバル会長は警察と連携し、警備員を雇うなどして平和的なデモに努めるとした。

ジャカルタを一望

左手前で細い堤防を突き出しているのはジャカルタ漁港。その右には急速に開発が進むパンタイ・ムティアラの高級住宅地が見える。首都中心部の高層ビル街にかぶさるスモッグの奥には、漁港から80キロほど離れた西ジャワのパングランゴ山（標高３０１９メートル）やグデ山（同２９６８メートル）といった山々がそびえている＝写真。

この幻想的な写真を撮ったのは、ジャカルタ漁港の開発に、立案段階の１９７０年代後半から携わってきた折下定夫さん(65)。3月に一線を退き、現在はオリエンタル・コンサルタンツの非常勤嘱託を務めるほか、ボランティアとして漁港の支援のために日本とジャカルタを行き来している。

この1枚は3月31日午前8時15分ごろ、シンガポールからジャカルタに向かう旅客機内からデジタル一眼レフのニコンＤ８００で撮影した。焦点距離は50ミリ、シャッタースピードは１６００分の1。日本の政府開発援助（ＯＤＡ）を活用し、日本のコンサルタント会社が中心となった同漁港の開発に30年以上関わってきた折下さんは、漁港の様子を記録に残そうと、ジャカルタ北岸を通過する際は常に窓側の席を確保し、すでに20～30回は撮ってきた。「このようなはっきりとした写真が撮れたのは初めて。最近はスモッグがひどく、漁港でさえ良いものが撮れませんでした」と話した。

林 哲久の

為替経済 Weekly

直接投資が増加も 環境は確実に悪化

インドネシアへの今年第１四半期の外国直接投資が前年同期比27％増の67億ドルに達したと発表された。バスリ投資調整庁長官は、今年の投資総額は前年比25％増の３９０兆ルピアに達するとの強気の見通しを表明。投資の内訳も天然資源、プランテーション関連から製造業セクターに移行しつつあるとの見方を示し、今年の海外からの投資意欲の継続に自信を見せた。

しかし、製造業の中身を見ると、国内携帯電話関連や自動車関連など基本的に内需向け投資であることには変わりなく、インフラ開発の遅延、大統領選挙に向けての保護主義的動きの高まりや最低賃金の急上昇など、インドネシアを取り巻く投資環境は確実に悪化しているという見方の方が的を得ている。

現在の好調な外国投資にあぐらをかいていると、今後も拡大を続ける強い個人消費にけん引される形で、来年以降、海外からの中間財や加工部品の輸入拡大に跳ね返っていくことを考慮すると、一層の経常収支赤字拡大が予想され、輸出セクターへの投資誘導がなければ、いつまでたっても総合収支の改善にはつながらないことになる。むしろ、投資許可手続の迅速化、市場環境の変化に対応できず、足元をすくわれる結果にならないか、注意を喚起しておきたい。

バスリ長官は、実際、今年に入り資本財の輸入が減少傾向にあり、来年の外国直接投資が減少に転じる可能性を指摘し、ネガティブリストの改定、地方政府との連携強化などを今後の投資誘致に向けての改善点として上げている。

一方、銀行法改正に関して、議会筋からホールセールバンキングに特化する外銀支店には、引き続き支店ステータスを認める案が検討されているとのことで、インドネシア企業やインフラプロジェクトへの外貨建融資において、安価な資金を安定的に供給できる外銀支店の役割の大きさが適切に認知され始めたことは評価できる。行き過ぎた外資規制が国内企業の資金調達コストの上昇に跳ね返ることがようやく理解されたのは、最近にない朗報である。（三菱東京ＵＦＪ銀行ジャカルタ支店・林哲久）

じゃかるた新聞

Menara Thamrin 305
Jl. M.H. Thamrin Kav.3
Jakarta 10340
Phone : 62-21-230-3830

Rp.12,000

編集協力 びすく社

© PT. BINA KOMUNIKA ASIATAMA, BYSCH
License No.508/SK/MENPEN/SIUPP/1998

倉庫、レンタル工場 建設中

SURYACIPTA CITY OF INDUSTRY
more facility, more opportunity

ジャパンデスク:
北岡 春雄
+62-8212-2910-329
+62-267-440088 ext 210
haruo.kitaoka@suryacipta.com

信頼される安心を、社会へ。
SECOM
フリーダイヤル:0800-11-73266 田中・橋本・椿・義尾

為替・株価

休日のため取引なし。

10,000円＝939,100ルピア
1ドル＝9,410ルピア
（26日、三菱東京UFJ銀行T.T.B）

10,000円＝984,000ルピア
1ドル＝9,700ルピア（両替商調べ）

インドネシア証券取引所株価指数
休日のため取引なし。
（26日終値＝4978.507）

みなみ十字・第44号

☆インドネシアに来て初めてわかった事

中学部２年２組（執筆時）

長橋　良隆

僕はこの夏休みの始め頃にここ、インドネシアに来ました。最初インドネシアに来るまでは、どの様な場所かも見当がつかなく、とてつもなく不安でした。しかし、ここに来て実際に住んでみたら、徐々に色々な事に気づきました。その中の二つを挙げようと思います。

まず、「英語の重要性」です。日本ならば日常生活で英語使うことなんて余りありませんでした。使うとしたら、英語の授業が特別行事ぐらいでした。しかし、身の回りにいるインドネシア人の方々には無論日本語なんて伝わるはずがないので、やはり英語を使うしかありません。例えお互い片言であっても、意思表示ならそれで十分です。だから、英語をしっかり勉強し、使えるようにしたいです。

次に「物価」です。こちらの物は安い傾向があります。しかし、日本の品物が妙に高かったりする場合もあり、かつ日本生活並みの供給があるとも言えないので、「現地の物に慣れる」という事をもう少し考えて毎日の生活に取り入れたいです。

まだ来て間もないので、これからもインドネシアの文化や言語に触れつつ頑張りたいです。

フラッシュ・ニュース

■きれいなバラにはとげ

国家麻薬委員会（ＢＮＮ）東ジャワ州支部と同州グレシック支部は27日、地域で活動する麻薬密売組織のメンバーとみられる、美しいと評判の女２人を自宅で逮捕した。同時に女から覚醒剤300グラムなど麻薬と現金２億ルピアなどを押収した。住民は捜査員の急襲に驚き、付近には人だかりができていた。（オケゾン）

■運搬中に事故

警察は28日、オートバイで大麻を運んでいたとして私立大学に通う男２人組を逮捕したと発表した。２人は27日深夜、ホテル・インドネシア前ロータリーで女性が乗る車に衝突、直後に逃亡しため警察が追跡していた。けが人はなかったという。現在２人は麻薬の尿検査を受けており29日に結果が出る。（ドゥティック）

■身勝手な犯行

北スマトラ警察はこのほど、女子高生（17）を殺害したとして、20歳の男を逮捕した。男は女子高生に好意を抱いていたが、断られたため、殺意を抱いたという。19日夕方、オートバイで女子高生をゴム農園に連れて行き、乱暴した後、首を占めて殺害。遺体に火をつけて証拠隠滅を図ったとされる。

（ポス・コタ）

文化

漁港とわたしの40年

「ジャカルタ漁港物語」

折下（おりしも）定夫著

日本のＯＤＡで建設したジャカルタ漁港に、40年前から関わり奔走・奮闘した１コンサルタントの手記である。折下さんの粘り強さは賞賛に値する。

漁港は面積が東京ドーム17個分、年間の水産物取扱量は約20万トンで銚子や焼津漁港とほぼ同じだ。

スンダ・クラバの沖を埋め立てて新漁港を建設する大プロジェクトは、１９７３年から日本側調査がスタートした。第一期事業（埋め立て、港湾施設）は１９８０―83年、第二期（港内道路、電気、上下水道、冷蔵庫など付帯設備）は82―84年で、同年7月竣工式を行い開港した。

しかし地盤沈下など問題山積で、第四期（汚水処理場、地盤かさ上げ、管理棟建設）に加え、リハビリ事業を05―12年に実施した。

埋め立て地の海底の地盤がきわめて軟弱だった。上部10―15メートルが豆腐のような柔らかい粘土、その下も羊かんのような粘土、そこに竹で造った杭を多数打ち込み、上に竹で編んだマットを敷き、その上に石を積んで堤防を造るという先例の無い工法を採用した。

築地のような中央卸売市場の導入も特筆すべきこと。漁港の後背地は水産加工団地になっており、水産加工工場や冷蔵庫が立ち並ぶ。漁船員から工場の従業員まで４万人が働くという。加工品は冷凍コンテナでタンジュンプリオク港から日本や西欧へ輸出され、輸出高は１日１億円を超える。

19世紀後半の明治時代か、パサール・イカン（魚市場）を造ったのは永福虎という日本人だったという。20世紀後半は折下さんチームが新漁港を造った。両国の因縁浅からず。

コンサルタントは海外の現場を飛び回るから、帰宅は年に２、３回。ある時まだ5歳前の3男が言った。「お父さん一日一度は帰って来て」。漁港が完成したとき、折下さんはこう叫ぶ。「私の４人目の子どもです」。胸にグッときた。

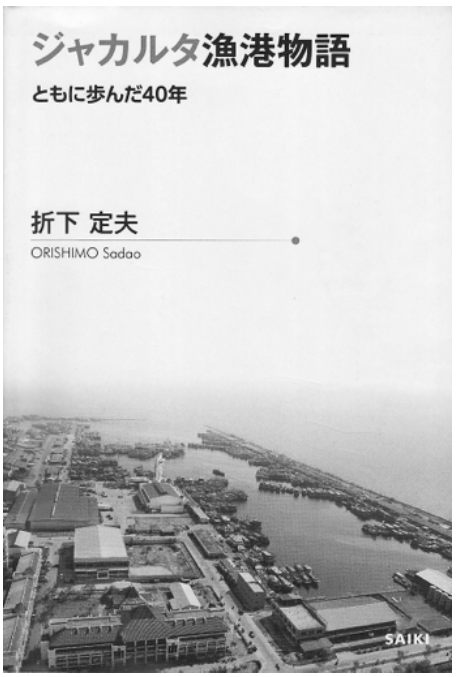
ジャカルタ漁港はＯＤＡの歴史そのものである。本書のように、その調査・建設・運用の全課程を記録に残す意義は大きい。専門書の色彩が強くなったのも仕方ないとは思うが、写真もイラストも豊富で読者の理解を助けている。

それでも、無い物ねだりのようなことを一つ。インドネシア側ともいろいろな軋轢があったことは、本書でもさらっと触れているが、実際は大変なご苦労だったと思う。切歯扼腕も多かっただろう。逆に窮地を助けられ心底感謝した時もあったはず。そういう起伏がもう少し書き込まれていれば、読み物としてもおもしろくなったのにと惜しまれる。

（臼井研一）

▽　▽

折下さんの連絡先（メール oris-888@oriconsul.com）佐伯印刷出版事業部 1620円



漁港の仕組み 興味津々

JJS社会科見学　5年生147人が参加

ジャカルタ日本人学校（JJS）の小学部5年生147人は27日、北ジャカルタ・ムアラバルにあるジャカルタ漁港で社会科見学をした。児童たちはコンサルタントとして30年以上にわたり、漁港に携わってきた折下定夫さんに迎えられ、興味津々に漁港内を回った。（山本康行、写真も）

漁港の社会科見学は、船着き場や冷凍庫など5カ所を回る恒例行事。2003年から毎年、折下さんが子どもたちに漁港を案内している。冷凍庫では白く漂う冷気の中を歩き、冷凍保存されたカツオなどを見学。「あっという間に髪の毛が凍った」とはしゃぐ子どもたちの声が響く。インドネシアで普段感じることができないマイナス20度の温度に驚いていた様子だった。

氷工場では水道水と塩水で一つ50キロの氷が一度に作られ、運ばれていく様子に興味津々。灯台に上り、風を感じながらジャカルタの海を一望し、下にいる友人たちに手を振って高さを実感した。

見学後、折下さんが漁港の歴史について説明。日本のODA（政府開発援助）案件として1984年に完成し、現在、日本の海でもインドネシア人の漁師や研修生が6千人ほど活躍していると話し、「日本とインドネシアはともに助け合っているんだよ」と強調した。

JJSでは漁港を訪れる前、社会科の授業で事前学習を実施した。永谷隆・小学部教頭によると、何も知識がない状態で子どもたちが漁港にあるものをイメージ。「船がたくさんある」などと仮説を立てた。

3組の寶川純君は以前訪れた沖縄の海と重ね合わせ、「石垣島の澄んだ海と比べて少し濁っていた」と感想を話した。2組の阿久津希和さんは「どうやって魚をとり運んでいるのか、漁港の仕組みが理解できた」と笑顔を見せた。

高さ35メートルからジャカルタの海を見渡した

子どもたちは氷工場から運ばれる氷を見つめた

アルミ缶回収で地域貢献

JJSの生徒会　開始から2年、息づく活動

ジャカルタ日本人学校（JJS）の生徒会が、地域貢献の一環としてアルミ缶の回収活動を続けている。2年前から始まった取り組みで、このほど生徒会の役員は交代したが、活動は継続することになった。社会参加の貴重な場として息づいている。

アルミ缶の回収活動は、環境対応のグリーンカーテンの購入資金集めとして、2012年6月に始まった。2年が経過した今は、地域活動への寄付金として役立てている。

今年度の生徒会長をはじめ、役員の生徒たちは「この様な活動は日本ではなかなか経験出来ない。自分たちの小さな活動が大きなものにつながっていくことにやりがいを感じる。活動を通じてインドネシアの人たちに貢献できると思うと、頑張れます」と口をそろえる。担当の菊池茶麻梨教諭は「生徒たちにとっても良い経験になると思う。この活動を通じ環境について考える機会にもなれば」と話している。

生徒会役員は次の通り（敬称略）

生徒会長・山下雄大▽副会長・川合流以、松雄香怜▽役員・堀颯太郎、内藤柾哉、西分美里、森礼奈、柳川理衣奈

アルミ缶の回収を続けているJJS生徒会の役員たち

バティック博物館建設へ

タマンミニ・インドネシア

ジャカルタ特別州は26日、東ジャカルタのテーマパーク「タマンミニ・インドネシア・インダ」内にバティック（ろうけつ染め）博物館を建設する計画を明らかにした。

ムスリアル・カシム教育文化副大臣は、博物館の建設を「インドネシアの伝統工芸を保護し、後世に残すことが必要」と説明し、ジョクジャカルタや中部ジャワ州ソロなど各地に点在するバティック博物館の集大成とする計画。研究機関も備える。

完成後は各地のバティックやバティック柄の歴史を説明するパネルなどを展示し、体験施設も設置する。

13日には外観デザインの審査を実施した。建築家やデザイナーのチームから計47作品が集まり、インドネシア・バティック財団（YBI）やインドネシア建築家協会（IAI）の専門家らが審査した。採用されたのは、中央を吹き抜けにした回路構造で五角形型の建物をデザインした建築家イファン・エイドリアン・ハディサプトラ氏のチーム。斬新なアイデアと、吹き抜けを使った光を多く取り入れたデザインが評価された。

州政府は2015年の完成を目指して建設を始める。バティックは、09年にユネスコの世界無形文化遺産に認定されている。

インドクラフト開幕

中央ジャカルタ・スナヤンのジャカルタ・コンベンション・センター（JCC）で「インドクラフト&ファッション2014」が開幕した。31日まで。

バティック（ろうけつ染め）などの衣類やアクセサリー、トウや竹を使った家具や工芸品などを販売している。28日午後4時から女性ムスリムファッションのデザイナー、ハニー・ハナント氏のファッションショーもある。

午前10時～午後9時まで。

バティックやイカット、刺しゅう製品など各地から集められている＝アンタラ通信

公用車返却せず

各州県議会で相次ぐ

インドネシア各地の州県市議会で任期終了後（2009～14年）の議員が公用車を返却しない例が相次ぎ、州政府や県は返還を求めている。

ジャカルタ特別州は26日、州議会議員に割り当てた公用車96台のうち、69台が未返却と明らかにした。州政府は25日までに返却するよう通達していたが、議員が守らないため、期限を今月末まで延長した。未返却の議員には州側の担当者が議員を訪問し強制的に返却させるという。返却された公用車は4月の総選挙で当選し、26日に就任した州議会議員（任期14～19年）に引き継がれる予定だ。

西ジャワ州バンドン市では同日、公用車41台のうち、返却されたのは15台のみ。リアウ諸島州バタム市は45台のうち27台が未返却だ。

東ジャワ州マラン市では議員に配布したパソコン45台のうち、10台が返却されておらず、市担当者は「市の所有物は期限までに返すべきだ」と話した。

イ人女性16人が人身売買の被害

マレーシアで逮捕

マレーシアでインドネシア国籍の女性16人が人身売買され、1年間にわたり性産業従事者として働かされた後、今月中旬に地元警察に逮捕された。インドネシア国家警察が27日、発表した。

女性16人は家政婦として働く条件でマレーシアに渡ったが、あっ旋業者に騙され性産業従事者として働くことを強要。全員のパスポートは偽物で、月給は100万～200万ルピア（約9千～1万8千円）だった。

国家警察によると、あっ旋業者の中にはマレーシア当局の事業許可を受けず営業しているケースが頻発し、人身売買や詐欺の被害に遭うインドネシア人出稼ぎ労働者が多い。